

「あはれむべし、卑近なる在俗の通語以外、わからぬ奴だな」

「現社會の人間だ、十世紀以前の牛馬を弔ふやうな寢言が分つて堪るか」

「は、は、は、牛馬と吐すわい、なるほど泥牛空に飛び石馬水に入るの理が通じない筈だ、青山白浪起り、井底紅塵颺る、猶更ら以て分るまいな、つまり汝は男女卑猥の春畫草紙を以て見性成佛とする奴だ、何ぞ其れ女郎屋に腰の脱けるまで居續けして涅槃の大往生を遂げざる、乃至また女湯の三助となつて隨喜渴仰の餘りに氣絶するも妙ではないか」

「黙れ、泥牛が空に飛んだり石馬が水に入つたり、さういふ馬鹿な夢を見てる奴に色情學の眞理と目的とが解せられるかい、そもく吾人々類の避くべからざる色慾を遺憾なく其のまゝの自然に利し本能に歸して、高尚なる理性的の發達に渾然と同化さすべき研究だ、春畫草紙と女湯の三助以上、おのれには分るまい」

「咄々、この大安樂に處し大自在に居して、かく大悟徹底せる宗立に」

「また大の字を聯ね出したぞ此奴、わるい病だ、試みに小の字を連ねて見る、いくら大の字を叫んでも汝は五尺の身體で家は九尺一間だ」

「は、は、は、汝は五尺の身體なるが故に短かしとし、九尺一間の埒なるが故に小なりとするんだな、喝この宗立、肉身五尺と雖も本來の面目は虚空に溢れたり、九尺一間の破れ疊三枚も正に是れ無邊の大禪床大禪窟と知らざるか」

「おや、また大の字を唸るんだな、兎も角も鐵鉢こゝへ持つて來い乃公の糞壺にしてくれる、汝のやうな奴に爪の垢を煎じて飲ましたぐらゐぢやア無効だ、糞を喰はしてやるから」

きくや否、もはや坐にも得堪へぬ宗立坊、八萬四千の法門を破るが如き勢ひに飛び出せば、色情學者の富田剛太郎また拳固を振り舞はして跳ね出す勢ひに、流石の贅六、

こりや叶はんと自己が堪へ遁け込みながら、やはり口だけは達者な奴なり、
「互に負けては不可ンゼ、さア其處ぢや、估券の極め時ぢや、やアいよく始めくさ
ツたわい」

是非一如もなく正念工夫もなく、咄この杵臼野郎と九尺一間の大禪窟を躍り出した宗
立坊、や、この乞食坊主と破れ疊三枚を蹴立て、飛び出した色情學者、雙方より一時の
出合頭に目から火の出るやうな鉢合せ、あつと等しく叫んで左右へ尻餅を搦きしが、
また忽ち跳ね起きて互に負けす劣らず拳を固め脛を上げながら、打つ蹴る叩く喰ひ付
く引ツ搔くといふ大騒動、果は團子の如く組み合せて、ころくくと轉け出しぬ、
をりしも久しぶりの熊さん、其後の状態いかにと舊を忘れぬ心の優しさに入り來りし
が、この體を見るや否、仔細は知らず眞一文字に飛び込んで、色即是空と生殖機能の
中央を引割きながら、相も變らぬ例の調子、

「まった、まゝ待った、不意に飛び込んで來て何だか知らねエが汝さん方、おい、危
エよ、兎も角この喧嘩ア預かつた、初対面だが後で分る男だ、第一これほどの騒動
を長屋中、誰も止めに出ねエのか、石作どうしたい、鑛糞も八卦よい屋も居ねエの
かい」

さんざ贅六に冷かされて悄氣返り、今また眼前の喧嘩に恐れて居縮みつゝ、おのが穴
に青く小さくなりし石作と朝鮮髻、この聲を聞くや否、俄に勢ひを得て先登第一の八
卦よい屋、雀躍しながら肩を侍て目を剥き嘴を尖らして跳ね出しぬ、

「やあッ誰かと思へば熊さんかい、逢ひたかつたよ熊さん、その念が届いて熊さんが
來た以上、もう確乎だ、大丈夫、驚かないぞ、さア托鉢も杵臼も靜肅にしろ、全體
其奴等、我々の前も憚らず此長屋で勝手に喧嘩口論するとは、けしからん奴だよ熊
さん、何日かは懲戒めてやらうと思つて居た折柄だ、わけて右側の一軒目から四角

な面を出して平凡義太め、ちかごろ甚だ以て拙者の氣に入らん野郎だ、幸ひ今日こそ、この幸運齋が承知しないぞ、石作さん、出ないかね、宜いところへ熊さんが来てくれたよ」

石作も此奴また八卦よい屋と同じ鑄型の人間、まして近來の不平満々、自己が専有でもない此長屋を新參の奴等に荒されて口惜しまぎれの折柄、操人形の如く手足を動かして飛び出しぬ、

「これは熊さん、珍らしいね、いや懇話は後で、ゆるく、時に近ごろ新らしく這入ッて来た連中は、よく聞くが宜い、その熊さんは此長屋の開闢以來、またと二人のない名物男で別して我々とは一方ならん深い馴染だ、安く見違ッて貰ふまいぜ、ねエ朝鮮さん」

「や、さうとも、無論だ、をかしく變に見る奴があれば拙者、そのまゝに捨て置かん

覺悟だよ、さア喧嘩も義太夫もあるもんか、一時に引ッ込んで仕舞へ」

熊公、おもはず面を皺めて苦笑しながら、石作より朝鮮髯より先づ差當ッて喧嘩の本

人、兎も角も色情學者と托鉢坊主を左右の塙へ押込みぬ、
「はゝゝゝ隣り合ッて喧嘩するほどのこつた、どうせ雙方に文句はあるだらうが、どうだね、こゝは一番、縁あッて飛び込んだ時の氏神だ、わッしに免じて貰ひてエ、なアに石作と朝鮮髯、ありやア昔から罪も報いもねエ、あれツきりの人間でさアね、はゝゝゝ」

笑ひながら軽く振返ッて、また贅六の塙を差覗きぬ、

「お喧しう」

杵白野郎も乞食坊主も雙方ともに實は糞やけの摺み合、互に頭の瘤と面の蚯蚓張を後日の記念に残して、これ僥倖の仲裁に引分れしが、流石の贅六も兼て聞き及びし熊公

の勢ひに聊か薄氣味わるく無言のまゝ自己が堪へ縮み込みし體を見るや否、猶更ら俄に肩胛を張り出す石作と朝鮮髻、熊さんおもはず笑ひながら押戻しぬ、

「おい、どうしたもんだい、二人とも年齢に不足のねエ五十面さけて、相變らず困るぢやアねエか、久しぶりに來た乃公だア、少しやア眞面目に落着いた態度を見せて貰えてエよ」

「いや、熊さん、さういふがね、全體この頃の奴等ア、古參の我々を馬鹿にしやアがツてね、それが拙者、第一、何よりも残念で堪らない、ねエ石作さん」

「眞實だよ熊さん、幸ひ、かういふ時に何とか我々の箔を付けて置かないと彼奴等、根が生け太くツて横着だからね、どこまで人を馬鹿にするか知れた奴ぢやアない、現に熊さん、なさけないよ、毎日々々新入の彼奴等に好きな熱を吹かれてさ、こゝ」

に居残りの二人この一軒で心細い相住居だ」

熊公、例の調子の高笑ひ、

「意氣地のねエ事をいふぜ、はゝゝゝしかし相住居は結構だ、何にせよ古い馴染が離れるより同棲になりやア、雙方の便利で萬事に都合の好い結果だ、時に糞糞は、どうした、何、女に引取られて出たア、や、こいつア驚いたね、なるほど人の運といふ奴ア分らねエもんだな、あけても暮れても長の歲月、變な目付で西の空ばかり睨んで居たツけが、河童にも引ツ込まれず女に引取られたとア、兎も角も悪くねエ談話だ、目出たいよ、ところで今の喧嘩にお虎婆の聲がしなかつたやうだね、えッ、死んだア、あの色狂者に遁け出された後で、むゝさうかい、死神にまで見放されて居た流石の業突張も、いよく業が減して苦駄張ツたんだな、死んだと聞いちやア、あんな因業婆でも久しい間の馴染甲斐だ、せめて、棺桶の片棒を荷いでやりたかつ

たね、南無阿彌陀佛、どうせ死際は善くなかつたらう、かはいさうに、これで前後この長屋から二個の死骸を持ち出した結果だな、星影先生とお虎婆、さて今度は誰の番に當るだらう」

さらぬも心細き石作と朝鮮髻、ますく萎れ返つて半泣きの澁面を作り出しぬ、

「おい、熊さん折角、久しぶりに来てくれたは有難いが、いやに妙な事を言ひ出してくれるよ、さうでなくつても近來、何だか變に氣が減入つて、舊のやうに面白くない時だよ」

熊公、いよく身を反しての高笑ひ、

「は、々、々、戲談だよ、は、々、々、しかし氣を悪くして濟まない、延喜直しに一盃、奢らう、實ア何か手土産を提げて來る筈だがね、お互に腹の底まで知り合つた故舊で無駄なこつたと思つてよ、ざつくばらん此五圓紙幣一枚、三人で心持よく飲んで仕

舞はう、ついでながら鼻アも宜しくと言つたぜ、大浦の旦那も其後ますく御繁昌だ、おかけで熊も案外、喜んでくれ、この通り煩はねエよ」

いかに人間の屑の捨場所とはいへ、由來この八軒長屋へ流れ込んだ奴、死ねば狼狽へて首を吊るか藻掻いて苦駄張るか、無事に生きて出る奴は居るに居られぬ俄の出奔、行方も知れずなりし中に熊さん只一人、自然の運に叶うて浮び出でしのみか、をりをり訪ひ來て財布の底を叩きながら、さア久しぶりで飲まうとは、どこまでも天晴れ男に出來た男なり、

實は月に七十五錢の家賃を拂ひ兼ねて相住居の石作と朝鮮髻、わけて二日越の空腹に半泣きの額を鳩めし折柄、おもはぬ不意の五圓紙幣一枚、熊公の懷中より抛け出さるるや否、あまりの嬉しさに物も得言はず、たゞ無言のまゝ草殻の如き手を出して左右より拜みぬ、

「おい／＼何の眞似をするんだ、いぢらしい事をしてくれない、こりやア乃公の年貢納めだ、わざ／＼外から来て無縁の他人へ御馳走するんぢやアねエせ、兄弟のやうに仕合ツた同じ穴から一步お先へ這ひ出した申譯だ、その覺悟で心持よく飲んで貰ひてエよ」

石作、いよ／＼感に堪へて頻りに瘦せッ首を振り出しぬ、

「どうしても熊さんだ、違ッてるよ、あらためて今更お世辭をいふでは無いがね、なるほど、自分で求めなくツても、運よく無事に出る筈だ、いつまで此長屋にコビリ付いて根の生える人間ぢやアない、つまり大浦の大將は神様の御使者で、わざ／＼熊さんを拾ひ出すため一時こゝに來なすツたんだぜ、これを考へると外の奴ア兎も角、あの西川、うれしくない男だよ、古い馴染が段々と減ッて來て、わづか三人になツた中を自己が一人、どうか斯うか出るんだから、残る奴より少しやア調子の宜

い筈だに一合の酒も奢らず、のろけ交りの鼻唄で出たまんま、今だに影も形も見せないぜ、ねエ朝鮮さん、こゝまで人間も違ッて出来るもんかなア」

八卦よい屋、返答もせず、ほしやく／＼髯の端を捻ねツて其まゝ搦を這ひ出しぬ、

「どこへ行くんだ、おい、黙ッて何處へ行くんだよ」

「いや、石作さん、その返答を熊さんの面前で君にしたツて効がない、内輪同士だからね、つまらないよ、そこで拙者あの杵臼と托鉢に一應、この仔細を申し聞けた上、とりわけ萬事に付いて近來の癩に觸る贅六、彼奴にも我々と熊さんの此處まで親しい交誼を篤と言ッて聞かすんだ、さうして置かないと石作さん、今後ますます我々を軽く見る奴等だからね、易に曰く精義入神以致用是也、つまり熊さんの精義が自然と神に入ッて以て、それがため恐れを抱く今後の彼奴等、もはや我々に頭が上らず、ぐうの音も出さず、何事も仰せ通りの用を致しますといふやうになるんだ、また

曰く易貴活用也、これを此まゝは惜しいよ、よろしく彼奴等に活用すべしだ」
 いかにも八軒長屋を出られぬ筈に生れて来た八卦よい屋、ひよこく歩み出す背後よ
 り、熊さん手を伸ばして引戻しぬ、

「馬鹿な事を言ッちやア困るよ、おい早く酒にしねエか、まア飲んだ上だ」

もとより我身の飲みたいためでなく、久しく乾きし石作と朝鮮髯の枯腹へ情の露を注
 ぎ込みに来た熊さん、主人持だ長居は出来ねエからと、そのまゝ袖を拂ッて立去りし
 後は、腰も立たず目も見えず海鼠の如くなりし二人、臟腑の溶けるまで喰ひ酔ひぬ、
 「石作さん、どうだい、かうなツた氣持は、長年の貧乏も苦痛も一時に忘れて仕舞ッ
 たよ、はゝゝこれこれ此まゝ醒めずに死にたいね」

「や、うまい事をいふよ、なるほど、この酒が醒めると、なさけない哉、また元の木
 阿彌だな」

「だが石作さん、まだ残ッてるだらう、氣の好い熊さんだ、あの五圓で酒が、二樽、
 下物が取交せて七十三錢、餘ッた錢を取らずに其まゝ置いて往ッたぜ、ある筈だ、
 あるかね、かういふ時に用心しないと油斷大敵、どんな奴が忍び込むかも知れない
 よ、あたり近所は何となく物騒な奴ばかりだからねエ、もし熊さんの芳情を無にす
 るやうな事があツちやア、濟まないぜ」

「あるよ、いくら酔ッても確乎だ、大丈夫、あるぜ、六十錢の酒が二升で一圓二十錢
 だらう、その上に七十三錢を加へて差引けば、残ッた金高か正に二圓と七錢、有難
 いね、まづ二人で當分の間、天下泰平だ、日に五錢づつの食物を喰ッて十錢と見積
 るんだ、宜いかね、すると朝鮮さん、お互に二十日の生命ある勘定だ、ところで半
 端の出る七錢を二つ割で三錢五厘づつだが、その三錢五厘で口に美味クツて身體の
 滋養になるものといへば全體、何だらうね」

「さア、何だらう、こいつ聊か考へもんだよ、三錢五厘で口に美味くツて腹に溜ツて身體の滋養になる食物、はてね、しかし石作さん、さう慌て、考へるには及ばないね、現に二十日の生命が安心だらう、ぢやア篤と二十日の間に腕を組んで、ゆるゆる考へるんだ」

「は、は、いかに、さうだな、二十日の智慧を絞れば、きつと何か考へ出せるよ、もし考へ出せば、日に七錢づつで二人が生きて居れる道理だ、一ヶ月で二圓十錢、一人前が一圓五錢だ、ところで朝鮮さん、世間の奴等ア、よく酒のために本心を失ツて前後忘却するやうだが、お互に我々、こゝまで酔ツて居ながら、この勘定を間違はない工合を見ると、案外、自分の思ツたよりは人間が確乎に出来てるんだぜ、それに何故、かう貧乏するだらう、不思議だね、どうも合點が行かんよ」

「眞實だ、こゝまで意地わるく長の貧乏するやうな人間には、生れて來ない筈だが、

どういふもんかな、つまり過ぎたるは及ばざるが如し、智慧はあつても運がなくツて、残念ながら時節に逢はないんだらうよ」

「は、ア、なるほど、や、さうだよ、それに相違ない、ぢやア此後、なるべく、お互に馬鹿な眞似して、わざと吹き出る智慧を出さない工夫するんだ、さうすれば今まで智慧に負けて居た運の奴め、欺されるとは知らず、こゝぞと思ツて一時に押掛けて來る、そいつを放さず、ぐツと掴まへるんだね」

「いはゆる敵を引寄せせる策略だ」

「妙々」

これで石作が當年こゝ五十七、八卦よい屋は正しく四十八なり、

この廣い世の中を探して死場所のない奴、あればあるもの、どこへ捨て、も惜しから

ぬ生命を無事に生存らへて、またもや一人、この八軒長屋へ新たに轉け込んだ浮世の厄介者あり、



年輩は五十三四、半ば禿けし胡摩鹽頭に長き馬面の頬骨高く、加之も節のある鳶鼻に

自然と突き出た掬ひ願、どこに一點の愛敬なき老爺ながら、辛み走った色黒に何とな
く垢ぬけのせしところありて、洗ひ曝しに古びたれど赤縞の絹雙子を身に纏ひ、名の
み残れど八反の三尺帯を寛く低く腰骨の横合に結んで、ぐつと咽喉の下に喰ひ込む眞
紺の腹がけ、七五三の仕立前を開いて毛脛の爪頭に輕き麻裏草履、もし昔を語れば、
女難と劍難の自慢談話を兩手に溢るゝほど持ち出して、これが權現様以來の嫡々、兎
の毛の交りツ氣もない生ッ粹の江戸ッ子と吐しさうなり、
荷ぎ込んだ雑物は一組の木綿夜具と、ちよん髻のない當時の男には殆ど不用の舟底
枕、されど此老爺、これで無うては江戸ッ子の寢首が据らぬといふ顔色、いづれ堅氣
の商人でなく、飯の種ありとすれば居職に相違なけれど、夜着と共に抱へ込みしは長
さ三尺程に切口を揃へし五十本あまりの竹束、さて何の職をする奴やら、
流石に氣前を見せて、一人當に五枚づつの筈蕎麥を配りし後、いちくゝあらためて挨

拶に廻りぬ、

「こりやアお初に、御免なせエよ、ふしぎの御縁でね、かういふ用の足りねエ時代おくれの老爺が一疋、ひよこりと舞ひ込んで來ましたよ、は、は、どうか今後お心易う願ひませう、お見かけの通り根がダラシのねエ職人ですから、實ア今日これつきり、ろくな御挨拶も爲得ねエ奴と思つて戴かねエと、もし此後、無様な事でもあつた時に困りませアね、と言つたやうな理由でね、は、は、前以て、お断りして置くだ、なアに、これでも長く實際つて貰やア自然と氣心の知れる奴さ、おツと忘れた、名は半助と言つてね、身に覺えた職は串削りですよ、は、は、」

口も調子も輕けれど、言葉尻の底にピンと拗ねたところを含んで、どこやら面に一癖ありけな勇み肌の江戸ッ子老爺、例の生殖機能と色即是空の二人に對ひながら、のっそりとして圖太き贅六義太夫の壁一重隣家へ住み込みぬ、

世間の俗諺に彼奴、楊枝を削る腕もないといへど、これは串削りの半助と名乗つて、右側の奥より二軒目に住み込んだ生ッ粹の江戸ッ子老爺、最早年齡は五十の坂を四五年前に越えながら、まけぬ氣の勇み肌に馬面の鳶鼻を蝨めかして、どこやら昔の繪草紙に残る高麗屋の面影あり、壁一重を隔て、隣屋の贅六、此奴また誰彼なしの鵜呑みに呑んで掛る奴、きのふの蕎麥の禮かたぐ、四角な面を差入れて、この長屋の先登第一に饒舌り込みぬ、

「昨日は御丁寧な事で、いやもう近頃はない、お美味う戴きましたぜ、その上、一人前に五枚づつとは、どれらい豪奢ぢや、は、は、時に貴君、串を削るのが内職ぢやさうなが、全體どんな串を削りなはる、なんにする串か、お手許に出來たのが、おまへんかな、あれば私、ちよと見せて欲しい」

串削りの半助老爺、じろく、贅六の面を見上げながら、例の鳶鼻を右手の指端に捻つて首を振る癖あり、

「は、ア、おめエ、上方もんだね、や、面白い、わツしも親方の内に居た青ッほい時分に一度、づらかつてね、伊勢參宮から京大阪の見物して來た事があるよ、**改**改をの時、おめエに逢へなかつたらう、不思議だね」

流石の贅六、あツと呆れて、暫し口を閉ぢしが、さて其まゝでは凹まぬ奴、

「ぢやらくくと、あほらしい、まだ私は今年三十を出たばかりぢやがな、それに六十近い貴君が青二歳の時といへば、卯子にもなつて居らんわい、しかし私の親にでも聞いて見たら逢うた覚えがあるも知れんぜ、京大阪も半町たらずの一本道で、その顔が一目見た以上、忘れる顔かいな、は、ま、まさか近ごろ急に長うなつた理由でもあるまい、やはり昔から鼻に段があつて鳥の嘴みたやうになつて居ましたやろ

な」

「や、なか／＼乙な事をいふね、飴細工ぢやアなし團子細工ぢやアなし、また他の借りもんでもねエ、この馬面に鳶鼻は先祖代々の親遺傳だ、しかし上方、目のくり球を廣げて能く見直せよ、これが正真正銘、まがひのねエ江戸ツ子の本場に産聲をあけた生粹の男面といふもんだ」

「なアるほど、さやうかいな、いや始めて手数の掛つた文句の多い江戸ツ子はンの生きた面型を拜みます、時に江戸の手拭は何尺おます、とても上方の寸尺では頬被りが出來まへんなア、それで欠伸をしたら猶更ら足らんわい、は、ま、ま」

「ふざけるない、畜生ツ、足ツても足らねエでも、うぬの世話になるけエ、第一また願の下で正直に固く結び目を拵へるやうな百姓ぢやアねエぞ、ちよいと軽く鼻先で小意氣に被つて來た江戸節の兄哥だ、この猿ツけエりの野暮助め、相手を見て物

来て、する事といひ、吐す事といひ、近來ぢやア我々を人臭いとも思やアがらないぜ」

「や、さうかい、あの贅六め、いよく初太刀を喰ったかね、は、は、そりやア小氣味の宜いこつた、見なくつても溜飲が下るよ、しかし朝鮮さん、うかく、味方は出來ないぜ、まア當分どつちとも附かず、洞が峠に陣を構へて雙方の旗色を見定めてからの事だ、つまり向側に杵臼と托鉢、此方に贅六の義太夫と串削りの半助老爺、まづ急に勝負の付かない二組の戦鬨がある理由だからね、我々お互に寄らず觸らず、濟まし込んで見物する方が面白いよ」

「だがね石作さん、向側の喧嘩は七むづかしい事を吐して、ちよいと我々に分り兼ねる事があるから、ありやアあれで一組、別のものとして置いてさ、此方の相手が平生の癢に觸る贅六だ、この際これを機會に何とかして彼奴、ぐうの音も出せないや

うにしたいよ、あながち喧嘩の中央へ飛び込まないでも、餘所ながら一方へ力を添へてやれば宜いぢやないか」

「なるほど、さうだな、あの執念深い素根性の曲つた贅六を真正面に引受けちやア困るが、そつと一方へ内々で力を添へてやる理由だな」

「そさ、無論、さうするんだよ、ついでには石作さん、あの半助老爺、たゞ串削りでは音曲の司と吐す贅六に對して聊か幅が利かないから、まづ我々二人で聞いて見ようぢやないか、まだ仕事を始めないが、全體どういふ串を削るのか、誰しも自分の職業には皆それく道に依つて種々の效能書があるもんだよ、ところで、その效能書に我々また輪を掛けて、大きく長屋中へ吹いてやるんだ、ね、つまり取組の前に我々二人で充分しツかりと重量を付けて置いてやるのさ」

自力では逆も叶はぬ贅六に對して、おもはぬ不意の味方を得た心地、これ幸ひの半助老爺を差向けて、平生の無念を晴らさんとは、いかにも石作と八卦よい屋とが分相應の策略なり、

わざ／＼向側に杵臼と托鉢の居る時刻を考へ、わけて壁一重の隣屋に贅六の巢籠りを見定めて、この機を外さず半助老爺の塙へ押し掛けぬ、加之も四邊近處へ聞えよがしの大聲、

「やア親方、今日は」

半助老爺、まづ親方と呼ばれし一言が氣に入つて、満面の微笑もろとも例の鳶鼻を蠢かしぬ、

「さア、お這入んなせエ」

「いや別段、這入らなくつても此まゝで結構ですよ、なアに外に立つても内に居ても

同じこつた、江戸ツ子の腸で、ねエ親方、お互に立關も奥もない見通しの開けつ放しだ、はゝゝゝ時に親方、まだ仕事は始めないんですかい」

「はゝゝゝ江戸ツ子の腸ア嬉しいね、實ア今日から始める心算だつたが、縁起でもねエ、ちよいと今朝、へんな野郎に癩癩の蟲を觸はられてね、それがため手が出ねエよ、まア二三日その蟲の治まるまで此まゝだな」

「どんな野郎だか、そいつア面白くない奴だね、しかし親方、そんな奴を氣にして居ちやア堪らないよ、横ツ面の一撃も喰はした上で、仕事を始めた方が宜いちやアないか」

「なアに、きのふ今日こゝへ來たばかりだからね、堪忍してるのさ、今に乃公が仕事を始めりやア、削つた串を頭の素天邊から差し込んで、身體の裏表をコンガリと焼いてやらアね」

「は、は、は、まるで鮎あなの雀すずめ焼やきだね、さぞ熱あついこつたらう、火ひに掛かけられて野郎やろうどんな悲こ鳴なを出だすだらう、は、は、は、とここで親方おやかた、その削けつった串くしといふ串くしは全體ぜんたい、どういふ串くしを削けつりなさるんだよ」

半助はんすけ老爺おやぢ、俄にはかに腕うでの鳴なる心地こころ、ちらと傍かたへに積つめる竹束たけたばを睨にらんで、また例れいの鳶とん鼻びを右みぎ手ての指頭ゆびさきに捻ひねりながら首くびを振り出しぬ、

「おめエさん方の前まへだが、なにに依よらず兎角とかくこの名人めいじん肌はだに生うまれて來ると困こまるよ、ねエ、どれもこれも不思議ふしぎに揃そろって昔むかしからの貧乏びんぼうだ、現在げんざいこの乃公おれが今いま、かういふ状態げんざいになつて、こんな場所ばしょへ落おち込こんで來たも實じつア、憚はまかながら、この腕うでが少々せうく世間せけんの奴やつ等に違ちがつてゐるからだよ、なアに腰こし骨ほねを低ひくくして安やすく稼かせいで、うぬの身體からだを夜晝よるひる、仇敵かたきのやうに追おひ使つかやア天下てんか泰平たいへい、なんの不自ふじ由ゆうもねエがね、そかア性質うまれつきで、さうう脆もろく尋常しよくじんの職人しよくじん根性こんじやうにやアなれねエよ、は、は、は、しかし前口まへこう上じやうばかり大おほきくツ

ても無だ効めだ、こゝろ二三日にちで始はじめるからね、黙だまつて手てに取とつて、乃公おれが削けつった串くしを見みて貰もらひてエ」

「なるほど、や、恐おそれ入いつたもんだね、しかし親方おやかた、そりやア何なんの串くしだよ」

「戲談じやうだんちやアねエ、考かんがへて見みてくれ、串くしを削けつるに名人めいじんといやア知しれたこつた、外ほかにあるもんかね鰻うなぎの串くしさ」

「えッ、鰻うなぎの串くし、あの焼やいて喰くふ鰻うなぎへ刺さす串くしの事ことかね」

「さうさ、團子だんごの串くしだつて法はふのあるもんだぜ、まして鰻うなぎの串くしと來きちやア、八百八町ちやうの江戸えど前で乃公おれに限かぎるんだ」

山岳さんかく震動しんどうして鼠ねずみ一疋ひとびきの世諺よこわさ、天下てんかの名人めいじんは乃公おれ一人ひとりといふ勢いきほひ、そもく、何なんの串くしかと問とへば、鰻うなぎの串くしを削けつる名人めいじんと聞きいて、石作いしきくと朝鮮てうせん髻ひげ、おもはず互たがひに顔かほを見み合せながら、あつと呆あきれぬ、

されど半助老爺、いよく例の鳶鼻を蝨かして、古兵の千軍萬馬を物語る體、さア誰でも乃公の前に立つ奴があれば立つて見ろといふ顔色なり、

「今も言つた通りさ、葎實ッ張で婆さんが賣る團子の串だつて、それくその道になりやア随分、いろんな文句があつて難かしいもんだよ、たゞ竹の切れツ端を割つたばかりぢやア、をさまらねエ、まして鰻の串だ、鰻も鰻、沼や池の泥ン中で、のたくつて育つた眞ッ黒な田舎鰻ぢやアねエよ、どこの何といふ名のある淡水と潮の境目に、ゆつたりと育つた江戸前の本場鰻へ、ぐいと刺して、そろりと通人の前へ出る串だ、水戸の喜八が死んで以來、まづ乃公だよ」

朝鮮髻と石作、そろく煙に巻かれし體、

「なるほど、たいしたもんだな、ふむン、鰻の串にも親方、さういふ祕傳のあるものかね、第一その喜八といふなア、どういふ人間だい」

半助老爺、ますく吹き出しぬ、

「困るなア、水戸の喜八を知らねエぢやア、鰻のウの字も言へねエよ、だが今の奴等ア、おめエ方に限らず皆それだ、口でこそ生ッ嚙りにこつ濟まし込んで半可な事を吐すが、なアに高が駈け出し奴の木ねンぢんだ、すべて物中に資本金が這入つて居ねエよ、生意氣に串は喰はねエ鰻を喰ふといふ野郎さ、は、は、は、とこころが、この鰻といふもの實ア串で喰ふんだ、串の打ち工合と削り工合を一目、ちらと見て直接その鰻の本場か本場でねエか、また焼く腕の善い悪い分かるんだ、そいつを何にも知らねエで鰻が中ぐらるだから中串だの、いや大きいから大串だのと注文する、今時の奴等ア、話せるもンか、山の芋を筏に焼いて出しても、垂汁が充分で照りさへ出りやア額を叩いて悦に入る連中ばかりさ、は、は、は、序でに教へて置くが、中串といふなア一本の鰻を中央から兩斷に切つて、その二枚を三本打の串で焼いたところが

即ち中の字になるから中串さ、ね、彼奴等のいふ大串は二百目以上のホツカといふもんだ、もし鰻の大小をいへば中筋大筋と言つてね、串の事は一切、別だよ、しかし客ばかりぢやアねエ、どうかすると鰻屋にも當時は、さう心得てる奴があるから、なさけねエよ、つまり今いふ喜八は舊、水戸家のお六尺で、五六年前に八十を過ぎて死んだが、古今獨歩の名人といはれた串削りで、この人の削った串は自然の妙があつて、それく名高い鰻屋の寶物に残つてくるらるだ、その喜八以來、まづ今日のところぢやア乃公だね」

石作と朝鮮髯、もはや面くらつて言葉もなく、たゞ其顔を打守れば、半助老爺こゝぞと一入の大氣焔、燃ゆるが如し、

「さア、これから改めて委しく串の削り鹽梅を言つて聞かさう、なアに今までののは唯ちよいと談話の序に鰻の香を、さしたばかりだよ、はゝゝゝ」

およそ世の中に名人といはるゝもの數あれど、流石に今この八軒長屋へ落ち込んで來るほどの奴、鰻の串削りを以て天下の名人と心得たる半助老爺、ますく坐を乗り出して次第に手前味噌を捏ね始めぬ、

「凡て物事はね、素人が見て何でもねエところに案外、むづかしい念の入った調子と呼吸のあるもんだよ、さうで無くつて水戸の喜八が、あゝ名高くなれるもンかね、つまり串の中でも鰻の串が第一に腕の入る理由さ、それに就いて斷つて置くが、乃公の削る串は今この東京で何軒といふ、わづか十本の指で數へるだけの鰻屋だぜ、ざらの川魚屋ぢやアとても價が張つて使ひ切れねエ、よし使つたところが、乃公の方で嫌だ、はゝゝゝまた鰻といふもの一日に幾何、潰すと見るね、まづ市中全體で鰻屋の數が大小とりませ八百軒と内輪に見積つて、夏の土用は格別、冬にしる少くも一軒で日に一貫目以上づつ割かないぢやア立たないもんだ、すると早い談話が一

て象牙のやうに迂り出すぜ、は、は、は、ついでだから外の串も誤して聞かさう、まづ
多いのが鯛の串、つまり雀焼の串は平角で三寸五分から四寸まで五寸が頂上だ、大
きいところで鯛串、三尺から三尺五寸ぐれエだ、鱈串が元角の先丸で一尺前後よ、
結び針魚が九寸の五厘丸で、皆いち／＼削り工合の違つた秘傳のあるもんだ、中に
も面倒なのは豆腐の串と湯葉串だ、あの豆腐といふ奴、大體が水氣を含んで手應の
ねエ骨なし野郎だからね、巾が五分で長さが一尺二寸ぐれエで、毛筋も歪ます眞ッ
直ぐに削りあげた串を打って、焼く前に、そつと切付臺から簀の上へ取るんだが、
もし萬一その串が少しでも曲つて居ちやア大變、半分は元の切付臺へ置いて來ると
いふ失敗を遣らかすんだ、は、は、は、また湯葉串も同じ難物で、なるべく性の宜い名
物竹を刀痕も残さず二尺二三寸の一分五厘丸に削つて、薄度を剥ぐやうに湯葉鍋の
中央から擧げたまんま懸けて乾すんだが、此奴また寸分でも串の削り工合に故障が

ありやア何にもならねエ、すぐに因果が報つて來て、ばたりと下へ落ちる結果だ、
また花見時に賣る慈姑の串ね、あれが難かしいよ、五寸ぐれエの眞ッ平に手際よく
削つて、その竹の根元と先端に大した呼吸があるんだ、さうでないとな奴、串を刺
す時に忽然、ほかりと割れるからね、は、は、は、
そも／＼鰻の串より慈姑の串まで天下の名人面に講釋せられて、石作と朝鮮髯の兩人、
そのまゝ無言に遁け出しぬ、

實は自己の味方に引入れて贅六を防ぐための作戦計畫、なるべく辛抱する氣の石作と
朝鮮髯が、流石に驚いて遁け出すほどの半助老爺、まだ／＼あれで自慢の爲足らぬ鳶
鼻を蠢かせば、隣屋の義太夫、此奴また天下に自己以上の名人はない面相、しきりに
舌鼓を打ち鳴らしながら果は堪へ兼ねて壁越の喧嘩聲なり、

「なんぢやい、あほらしい、いかに世の中の名人畑が枯れて来たとして、その名人に事を缺いて鰻の串削りがあるもんか、もし串削りと楊枝削りが名人の部へ這入るなら、満足に鯉節を削る下女でも鼻でも皆これ名人の中ぢや、は、は、それをまた感心して聴くとは、あの千三屋も八卦屋も、あほんだらの、底が知れん奴ぢやわい、は、は、は、」

半助老爺、また忽ち耳を欬て、壁際に捻ぢ向きぬ、

「何だと、この上方野郎め、をかしくへんに咽喉笛を鳴らしやアがると、身のためにならねエぞ、鰻の串を削らうが楊枝を削らうが、うぬの世話になるけエ、素頭の無事なうちに引ッ込んでろ」

「いや別段、わざわざ其處へ頭を出さんが、こゝで此ま、口が勝手に動いて聲が出るんぢや、なるほど鰻の串を削つても楊枝を削つても、私の世話にはなるまいし、ま

た世話もせんがな、片腹の痛い、名人といふだけ措いて貰ひたい、かりそめにも音曲の司で、日本國中に幾人といふ、その容易ならん御方が壁一重に住んで御坐るんぢや、少しは遠慮せい、うかくすると罰が中るぞ、罰も罰も、眞の名人罰が中ると怖いぞよ」

「や、こん畜生、ふざけた事を吐しやアがる、全體また音曲の司たア何だい」

「哀れな奴ぢやな、ふびんな男ぢやな、この有難い尊い音曲の司を知らずに生きてるのか」

「やい、やい、雨あがりの番傘を弾くやうに濕ッほい、ぺこく三味線で、調子外れの胴間聲を張り上げて夜露に打たれながら人の門に立つ奴、それが音曲の司か、市中でこそ幸ひ、もし山家なら狼の遠吠えと間違つて獵夫の筒先にかゝるぞ、用心しろ」

「は、雨あがりの番傘とは、面白いな、いや道理ぢや、耳のない奴には、さう聴えるかも知れん、この私の糸と聲が満足に耳の穴へ這入って、この節が腹へ通じるには、今から五年か十年の後ぢや、まアそれまで随分と氣を長う持つて身體を大事にさへすれば、どうかかうか、死際に半段ぐらゐる、聴いて分る人間になれるわいな、は、は、は」

「馬鹿ア言へ、うぬの平凡義太を現世で聴くやうな、そんな罪の深エ前世の因果に生まれて来た人間ぢやアねエンだ、男一疋、骨まで匂って叩けば鳴る江戸ツ子の生粹だ」

「は、ア、骨まで腐って叩けば泣く江戸ツ子の狂氣かいな」

「よく吐した、覺えてろ」

「念に及ばん、自分のいうた事を忘れるかい」

どうしても半助老爺と贅六とは此まゝの無事に済まぬ筈の雙方、いづれ一度は必ず互の鼻ツ柱を捻ねり合ふべし、



うき世の浪風に押流されて、この八軒長屋へ身の果を吹き付けらるゝもの、いづれ満

足の人間なけれど、こゝに一人の女、いづこよりか彷徨ひ來りて、同じ家賃の空家三軒を差覗きし後、まづ出入手近の便利を考へつゝ、石作と朝鮮髻の相住居に對ひ合つて、左側の入口へ轉け込みぬ、

そもく女といふもの、例の瀬田とよ子と松坂あさ子が行方も知れず遁け出して以來、熊さんの女房お菊が夫婦もろとも大浦卓三に拾ひ出されて以來、あれでも女は女お虎婆が苦駄張つて以來、こゝに始めての一人なり、

杵臼野郎と托鉢坊主、贅六の義太夫と串削りの半助老爺、石作と朝鮮髻、さらりと以上六人、いづれも男寡居に蛆が湧き出す中へ只一人の女、いかなる女かと思れば、塵埃溜に狼狽へた鶴も降りて來ず、やはり八軒長屋へ落ち込んで來る筈の女なり、女に廢棄物のない世の中なれど、これほ格別の廢棄物、よくく破鍋に閉蓋の縁さへなかりしか、やうく年齢は姥櫻の葉蔭を過ぎたばかりの初秋、まだ四十の内か外か

の中肉中脊、加之も襟首すつと伸びて撫肩の後姿は浮世繪より脱け出したる如き女振ながら、ぐるりと真正面に向き直れば、ありし昔日の面影、どれほど鬚の数を餌食にして來た應報やら、可憐ら眞白の瓜實顔に生れもつかぬ額際の風穴を、べつたりと眞ツ黒の膏藥張り三個所、右の咽喉下にも一個所の吹出もの、はや濕り氣を帯びて、ぶんと悪臭のする鼻聲の瘡毒女、つきくの素袷に苦しげの肌を隠し、ほろくの晝夜帯に罪深き腰を纏ひ、運命の尻切草履に地色も褪めし古手拭の姉さん被り、何があるやら長煙管の食み出せし一個の風呂敷包みを小脇に抱へながら、片手に露命を繫ぐ土鍋と焜爐の繩からけ、さては浮世の末、身の成る果、いかなる女の死に損ひぞ、恥づかしや人の怨恨の積り來て頼むものには竹の杖といふ、關寺小町を今この當世の眼前に見るが如し、

かくと見るや否、色情學者の富田剛太郎、まづ眉を蹙めて生殖機能の自説に聊か都合

の悪い顔色、托鉢坊主の宗立こゝぞと破衣の袖を拂うて今更のやうに色即是空の一喝を叫び出し、また贅六は爪弾の三味線に袖袂の一文句、神佛にも見放され、定めて世に落ち果て、居らうとは思つたれど、これはまた、あんまりの落魄れやう、今思ひ知り居ったか、とは此奴いつもながら悪洒落な奴、串削りの半助老爺は何にも言はず鼻に皺を寄せての苦い面、流石の石作と朝鮮髯も思はず顔を見合せながら聲を潜めて私語きぬ、

「どうだい、石作さん、いよくこの長屋も段々と價值が下つて来たぜ、たま／＼色の小白い女が落ち込んで来りやア、あれだ、あゝいふ瘡毒女と縁あつて一蓮托生に住むかと思へば、なさけないね」

「だって、仕方がないよ、我々の懐中から空家の屋賃まで拂つてるぢやアなし、どうせ、かうなれば、いろんな奴が這入つて来るさ」

「来るも宜いが、あまり酷いよ、第一また我々の眞向ふへ来るとは、けしからん瘡ツかき阿魔だ、何とかして贅六の隣屋へ遣りたいもんだね、串削りの半助老爺を一軒手前へ引き寄せて、その跡へ押込む工夫は無いだらうか、おや、石作さん、そろそろ出かけて奥の方へ行くぜ、はゝア長屋中へ挨拶に廻るんだな」

「しかし朝鮮さん、姿といひ顔立といひ随分、昔は美しい女だったらうな、惜しいもんだよ、ねエ」

「いくら姿と顔立が満足にしろ、今あれぢやア石作さん、たまらないよ」

「今あれだから此長屋へ落ちて来たんだよ、もし萬一あの瘡毒が無きやア、ちよいと心易く我々の眞向ふへ来てくれる女ぢやないぜ、はゝゝゝゝ」

「おい、石作さん、つまらない事をいふよ、さう聞くと拙者、ますます以て心細くな

らぬ」

いかなる應報に斯くなりし身の果てやら、花は昔の夢に色香も失せて、今は浮世に見るかけもない瘡毒女、青天白日の下に人間これが極度の生恥を曝しながら、さても此女さほどまでに思はぬ體、酒ア〜として長屋中へ挨拶に立廻りぬ、
加之も元來が水際の立ちし色白の顔面に、四個所の腐り穴を膏藥張の毒々しさ、多年の自墮落に身を持ち崩せし下司言葉の早口、猶更ら以て物凄し、

「御免なさいよ、妾は今朝この入口へ引ッ越して来た女ですが、どうか皆さんお心易く願ひますよ、御覽の通り近ごろ、ちよいと顔に妙な腫物が吹き出しましてね、困ッてるんですよ、しかし理由もなく自然に煩ッた病氣と違ッて、人様には何と思はれるか知らないが、まア兎も角も自分では長の星霜、さんざ面白い事のありッたけ世の中に爲盡して来た身體でね、實は差引勘定、どうか、かうか、觀念の付く身ですかなね、さのみ苦にもなりませんのさ、お暇な時でもありやア是非、聞いて貰ひたい

ンですよ、随分かうなるまでには尋常一般でない、手数のかッた女ですぜ、ほッお六といふんです、時と場合の成行で、わる達者な田舎俳優と同じやうに舞臺の變る度毎、いろんな名を持つて居ましたがね、やはり今ぢやア正直に本名お六で、マツチの函を張ッて、やう〜其日を送るんですもの、なさけない始末ですよ、かはいさうぢやアありませんかねエ」

恥も外聞も關はぬ瘡氣の鼻聲に、寧ろ却ッて自慢の口吻、果して此奴、いよ〜尋常の女でなし、
この瘡毒お六が左側の入口に住み込んでより五日目の朝、また一人、その隣屋の空屋に巢を構へし奴あり、年輩五十四五、身丈五尺八九寸、下駄を履いて六尺の小屋根を舐めるほどの大男、加之も骨太の色黒に肩巾の廣い腰車の張り出した工合、見倒し屋の古鐵買に見せても十八九貫目の體量、とる年と共に自然の肉は落ち脂肪氣は失せた

れど、漆喰の如く叩き固めし平額と兩耳の潰れし體、たしかに土俵の破より迂り落ち



て来た力業の脱殻、長屋中への挨拶は儲置いて、まづ第一これを見てくれと九尺一間の小さい軒下へ自己が身の古看板、五寸巾に一尺ほどの大ツかい表札を打付けぬ、

手取山勝之助

多年の風雨、さまざまの艱難に伴うて、どこを持ち歩いたか、こればかり放さぬ昔の記念に、木地も墨色も薄くなりし古表札の太文字といひ、本人の圖ぬけし身體といひ、いよゝ相撲取の成れの果とは見ゆれど、さて手取山勝之助とは兩國の櫓太鼓に響いた事のない奴、番付面の細文字にも見た事のない奴、さりとして素人でないとすれば、鎮守の森の宮相撲に草の根を撈つて来た田舎の關取なるべし、

女の廢棄物、鼻持もならぬ瘡毒お六と、男の廢棄物、談話相手にならぬ宮相撲の凋びた奴と、俄の二人に真正面の空屋二軒を塞がれし石作と朝鮮髯、ますく心細く泣き出しぬ、

「ねエ石作さん、揃ひも揃つて、とんだ奴が向側へ陣を取つたぜ、この後どうなるだ

らう、あと一軒の隣屋へ来る奴が思ひやられるよ」
 「さうさね、あの男女を向側へ置いて、あの色情學者に蛆虫の講釋を聞かされ、ついでに托鉢坊主の禪杖で横面の二撃三撃も喰ッて贅六に毒づかれた上、また半助老爺の削ッた串で腦天の中央を刺されて死ねば本望だ、もはや現世に思ひ置く事、さらに無しだね」

一年を二十日で暮す好い男、それは兩國の回向院の櫓太鼓の音高く鳴り響いた關取、とる歳と共に土俵を下りても力が脱けても四本柱に坐るか株を買うて勸進元を待つか、但しは弟子を育て、親方と立てらるゝ老樂の道あれど、これは本場所の番附面に自己が毛筋ほどの細文字さへ載ッた事のない手取山勝之助、あはれや草深い田舎まはりの宮相撲に昔日とツた力瘤が失せて、四十八手の外に身を碎きながら浮世といふ苦手に責め抜かれし弱腰の果、立ん坊となりて、いよく手も出ず足も出ず、今この八軒長屋へ一本脊負に抛け込まれし奴なり、
 されど昔の夢まだ覺めぬ五寸巾一尺の古表札に手取山勝之助の名を現はせしのみか、吐す事は天晴れ天下の大力士、日下開山の横綱でも張ッて來たかの如くなり、
 「はい、お長屋の衆、いづれも初の御目にかゝります、あらためて申さいでも張出した表札の本人、手取山勝之助というて、昔は随分、どんな相手にも押されず引かれず土俵を働いて來たもんだよ、さうだな、乃公が全盛は二十四五、小三十までの間で、恐らく上總下總から常陸一圓をかけて、まづ荷の重い奴も術の難かしい奴も、無かつたね、ところで本場所の年寄衆が涎を流して惜しんだよ、や、すぐ其ま、幕下へ付け出すとか、長くて五場所目には三役を請合ッたとか、いろいろ様々の手を變へ品を換へて頻りに蒼蠅く呼ばれたもんだ、もしあの時この脛が無事に兩國行を

渡れば、今ごろ回向院前の協會で一二の坐を占める立派な親方になれる奴を、なアに赤裸百貫の氣樂三昧、どこへ往つても業と力で金は取れる、稽古戻りの亂れ髪で好きな女は出来る、四方八方より最良の山で酒の池といふ時だからね、つい生涯の運を振り落して仕舞つたよ、は、は、は、今でこそ、かうだが、その頃の乃公を見せたかつたね、この通り身體に寸があつて骨が太くツて肩が廣くツて腰が張り出して、加之も自然の軟か味があつてね、ねんばりとした調子だから組んで善し、また出足が早くツて前捌きが善かつたから離れて善し、左でも右でも自由自在、捻る蹴る吊る抛ける掛けるね、なるほど手取山で誰にも負けた事のない勝之助といはれたものだ、それが今、かうなるとは、我ながら夢のやうだ、をり／＼昔の全盛を思ひ出して泣くよ、あ、面白くない世の中だなア」

初對面の挨拶に自己の自慢談話、骨と皮となりし腕を叩いて泡を吹き飛ばしながら明石も谷風も一呑みにするかと思へば、此奴また俄に凋れて昔を偲ぶ今の身の哀れさ、鬼のやうな面に涙脆い一雫、どこやら流石に相撲氣質の餘波を止めて、實は罪も憎氣もない奴なり、

八軒長屋に三軒の空屋、わづか五日のうちに二軒まで塞がりしが、瘡毒お六と宮相撲の萎びた手取山、せめて残る一軒に一人ぐらゐる男女いづれにせよ、少しは眞人間に似寄つた奴を入れたいものなり、

左側の四軒は杵臼野郎と托鉢坊主と宮相撲の萎びた手取山と瘡毒お六、右側は例の贅六と串削りの半助老爺に入口の石作と朝鮮髻、その間の一軒、また空屋のまゝの貸屋札を、偕も何者が剥いで取るかと思へば、一日の午後、いづこよりか一個の怪物、飄然として舞ひ込み来りぬ、

年輩三十前後、梟の如き目玉に近眼鏡をかけて、面の半分を茫々たる眞ッ黒の髻に埋

め、その髻の中より僅に獅子ノ鼻と唇端を現はせし男、もはや形の潰れし鳥打帽子を



糞丁寧に戴いて、自己の身にも合はぬ柳原の古洋服を纏へば手足ぬツと長く差出し、
浅草の露店で破れ靴一足を買ふ力も盡きたか、前齒の缺けし高下駄を履いて、夜具が

はりの古毛布を左の肩に掛け、ぶら／＼右の腰に辨當函の如きものを鼠色となりし白
金巾に包んでぶらさけながら、どこで借りたか持て餘したか知らねど、この晴天に雨
傘一本を脊負ひし體、洋行を爲損ねた鬼の寒念佛に似たり、加之も此奴、この一蓮托
生に落ちて來ながら、長屋中への挨拶にも立廻らず、まして蕎麥一個づつを配るでも
なく、身に一枚の着替もなければ、怪しげなる洋服のまゝ九尺一間の中央に澄まし込
んで髻面の中より眞丸な目玉を剥き出しつゝ、ほつねんと只一人、何をか頻りに考
へ込みぬ、

をりしも入口の相住居は石作の不在中、猶更ら眉を蹙めて小首を傾けし八卦よい屋、
實は聊か薄氣味わるく、そろ／＼壁越に聲をかけ始めぬ、
「だしぬけに失禮ですが、どうせ口を聞かずに居らない壁一重ですよ、時に貴君ア何
をなさる方ですな」

洋服男、やうく振り向いて口を開きしが、頗る言葉の横柄な奴、

「僕は或會社の職工だよ、しかし尋常の職工ぢやアないぜ」

「は、ア、多年の精勤で職長とでもいふんですかね」

「職長、馬鹿な事を言へ、職長の長が何だ、つまらない」

「大變な權幕ですな、だが先刻、お見受け申したところで、まさかね、お世辭にも會社の重役とは思へませんよ」

「だから職工だと言ッてるんだ、職工も職工、わざと勞働の激しい給料の賤い職工中の最下等に居るんだ、日給の多少が目的で職長になるやうな人間ぢやアないぞ、第一また多年の精勤とは、けしからん事をいふね、癢に觸る奴だ、苟くも僕は丸一個片おなじ會社に勤めた事のない男だ」

「や、妙な自慢ですな、そりやア貴君の病的ですかい」

「は、は、なるほど脳味噌の足りない血の氣の薄い君等としては、をかしく變に考へるだらう、おひく言ッて聞かすがね、そもく僕は今日の勞働者に於ける未來の救世主だよ、それがため自己まづ身を職工に投じて、いかなる程度まで悲惨の境遇にあるか、どのくらゐの壓迫を被ッて虐待されつゝあるか、この東京中の會社へ残らず片ツ端から這入り込んで實地に人權問題を研究した上、大いに爲すところあらんとする僕だ、由來の學歴と主義方針は話しても分るまいが、ついでに名だけ言ッて置かう、井上進だ」

「危険な名ですね、井の上を進む、おッこちますぜ、ちよいと聞くと身の上知らずだ、は、は、は」

何の因果に落ち合ひしやら、この世に生甲斐もなく、どこに死場所もない奴、づらり

と左右兩側に軒並びの築を構へて、またもや八軒長屋の貧乏繁昌、いよくこれで一軒の空屋もなく、ますますくわる達者に榮え行きぬ、

浪六全集(第十一編)終

八軒長屋 後篇

定價金 貳圓

著者 村上

發行者 東京市日本橋區本石町三丁目十四番地 加島虎吉

印刷者 東京市小石川區久堅町百八番地 村上新輔

印刷所 株式會社博文館印刷所



大正十五年二月廿五日印刷
大正十五年二月廿八日發行

發賣所

東京市日本橋區本石町三丁目
東京市日本橋區住吉町二番地
東京市本郷區本富士町二番地

電話 大手一三三六番
振替口座東京一七四四番
電話 浪花一四九〇番
振替口座東京一六三六番
電話 小石川七五〇三番
振替口座東京一六九四番

至誠堂書店
至誠堂第一分店
至誠堂第二分店

トエIE-23

浪六全集

縮刷

浪六先生の傑作
興味津々の快著

新式ポイント組
袖珍箱入美本
各册金二圓
(郵税十錢)

- 第一編 ■ 當世五人男 ■
- 第二編 ■ 黒田健次 ■
- 第三編 ■ 上田力 ■
- 第四編 ■ 倉橋幸藏 ■
- 第五編 ■ 川上三吉 ■
- 第六編 ■ 吉田雄藏・花車 ■
品さだめ
- 第九編 ■ 人間學 ■
- 第十編 ■ 八軒長屋 ■
- 第十一編 ■ 八軒長屋後篇 ■
- 第十二編 ■ 八軒長屋續篇 ■

終

